タイトル：違いを個性に
学校名・学年：関西創価中学校１年
名前：田代　直樹

（本文）
「カランカラーン」ガラス張りの引き戸を開くとドアに取り付けられた呼び鈴の音が心地よく響く。その音につられて「いらっしゃいませ」という女性の声がする。こじんまりとしたショーケースの中には、小さなケーキやプリンが並ぶ。隣にはクッキー。その奥にはおにぎりやお弁当。さらには手作りの組み紐まで一風変わったこのお店、「ジョイント・ジョイ」という近所のカフェだ。注文した手作りのレモンソーダとほろ苦いカラメルのかかったプリンを味わっていると、カウンターの向こう側に、厨房の様子が少し見えた。働いているのは障がいのある人たちだ。ちょうど掃除の時間だったようで、みんなが一生懸命に床を磨き、丁寧に棚を拭き、きれいに洗った食器を並べ片付けている様子が見える。

この「ジョイント・ジョイ」というお店は、障がいのある人たちの「働く場」をつくりたいという思いから、二〇一三年に立ち上げられたそうだ。この店を立ち上げた山本さんは、発案当時、仕事がないために居場所や生活の基盤を得られず、時には孤独死してしまうことさえあるというニュースを見て、障がいのある人たちが一人になってもご飯を炊けるようになってほしいとの思いから立ち上げたそうだ。一人ひとりの特性を見極め、人が好きで接客もできる人、誰かと一緒に作業することが好きな人、黙々と同じ作業をするのが得意な人、それぞれの得意を生かした仕事を提供している。

ここで働く障がい者の方々は、人の役に立つ喜びに目をキラキラさせているのが印象的だった。カウンターからチラッと僕たちのことが見えるとニコッと笑って会釈する。任せられた仕事を責任を持って遂行する誇りに満ちていた。スタッフの方たちも、みんなの安全と適性を確認しながら温かく、丁寧にサポートしている。その相互の信頼関係が、この店の温かく穏やかな雰囲気を作っているのだろう。日本には、昔から「自分と違うもの」を排除したり距離を置いたりする風潮があるように感じる。同じ人種で作られた国だからかもしれない。僕たちは小さい頃から「間違いさがし」「仲間はずれはどれ」などの遊びを通じて、「違うところ」を探すことをよくしてきた。そして「違い」を「間違い」として捉え、違いをなくすことに一生懸命になってきたのかもしれない。しかしこの店でみたのは「違いを個性として捉える大らかさ」だ。そのふところの広さは、きっといつか、この国をも救っていく。そう感じずにはいられなかった。

会計を済ませ外に出て、ジョイント・ジョイを振り返った。窓越しに見る彼らの表情は、夕日に照らされて一層輝いて見えた。